

# 石神遺跡第9次調査現地説明会資料

1990.12.1

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字ハリワケ

調査面積：約1200m<sup>2</sup>

調査期間：1990年7月16日から継続中

## はじめに

1981年からはじまった石神遺跡の調査は今回で第9回目となった。前回までの調査で、7世紀中頃から8世紀初頭にかけての各時期にわたってまとまった遺構を検出し、7世紀代の重要な遺跡であることがわかってきている。特に7世紀中頃の遺構のまとまりが良く、斉明朝の饗宴の場としての性格が想定されてきている。今回の調査区は第8次調査区の北に接する水田で、第1次調査からの調査総面積10,450m<sup>2</sup>に達する。

## 遺構

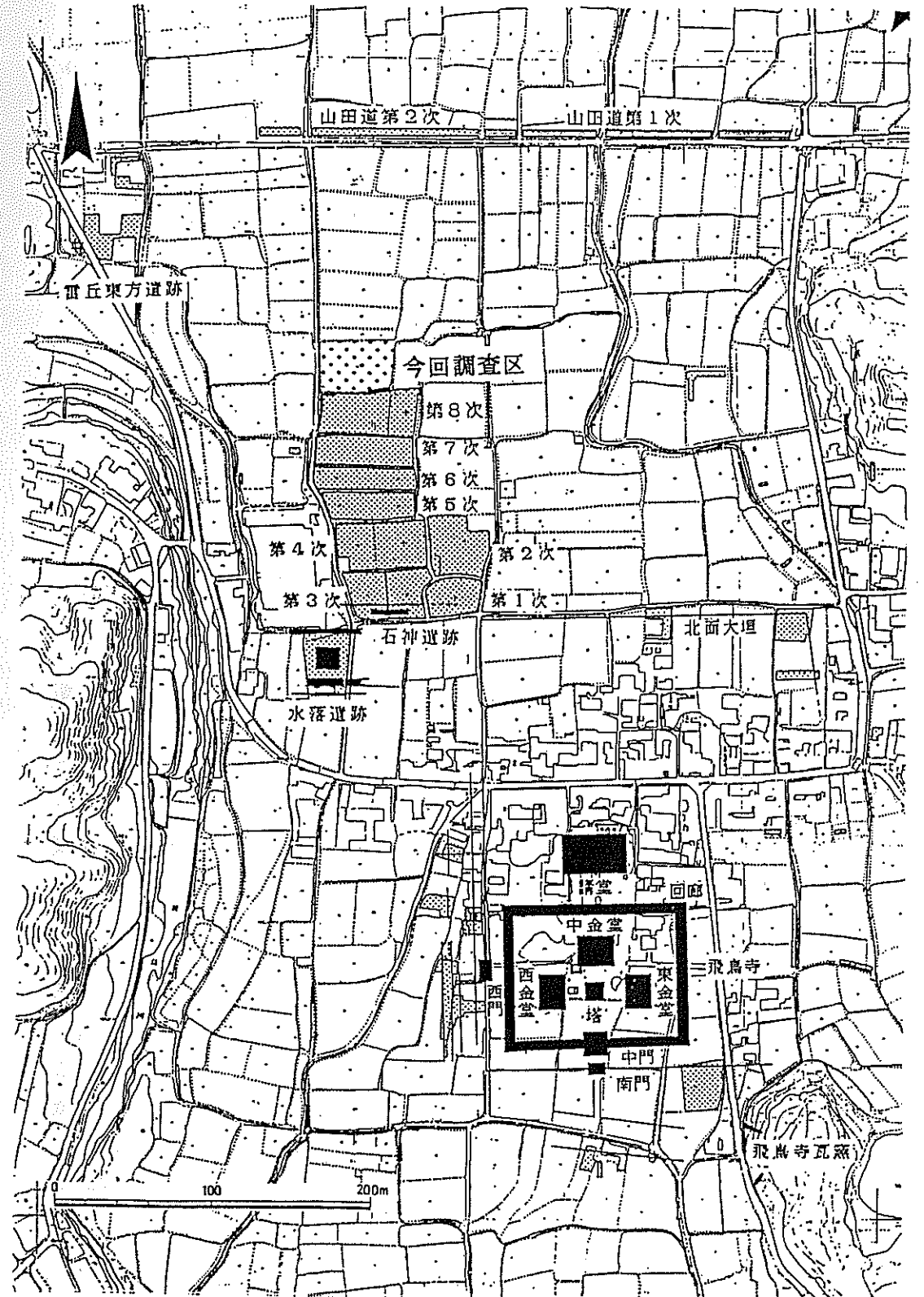
この遺跡の地形は東南から西北へ傾斜しており、古代の構築物は大規模な整地の上に営まれている。今回の遺構もほとんどが7世紀中頃の整地土上面で検出した。整地土は何層にもわたり、場所によって土質や厚さが異なる上、大きな土坑の存在も加わって、検出面はかなり複雑な状況を呈している。

検出した主な遺構は7世紀中頃から8世紀初頭にかけてのもので、大きくA期-7世紀中頃・斉明朝、B期-7世紀後半・天武朝、C期-7世紀末~8世紀初頭・藤原宮期の3時期にわけることができる。

〈A期〉遺構の重複関係から、これまでの調査結果と同様3つの小期に細分される。

A-1期；調査区中央に幅約30cmの南北石組溝（溝01）と、その東方4mに幅1.5mの南北石組溝（溝02）がある。この時期に伴う建物などは検出していない。

A-2期；第4次調査で検出した井戸から発する南北石組溝（溝03）の東西に建物が建つ。東側の建物01は桁行9間×梁行3間の南北棟建物で一



石神遺跡位置図

部基壇縁石が残り、黄褐色の山土を基壇土としている。山土上面からは柱抜取穴しか見えない。第8次調査の南北棟建物・東西棟建物と柱筋を揃える。西側には建物02・03・04がある。建物02・03は3間×3間の総柱建物で、東側柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱掘形の大きい建物04は調査区西壁で、南北5間分を検出した。建物03の東と南には、L字状に塀がめぐる(塀01・02)。

A-3期；最も遺構が整う時期である。A-2期から続く石組溝(溝03)の東には南北棟建物を廃して、極めて特異な建物(建物05)がつくられる。残念ながら東側部分が調査区外となり、全体の形状・規模は不確定であるが、現状では十字形の建物と考えられる。柱掘形は1.2m四方と大きく、柱間は約2.6m、現状での南北の長さは約15.6mである。石組溝(溝03)西側はA-2期の総柱建物2棟を廃し、やや位置を西北にかえてつくりかえる。さらに、溝のすぐ西に総柱建物(建物06)と南北棟建物(建物07)を柱筋を揃えて南北に配する。これらの総柱建物はその規模から倉庫建物と推定される。この時期の柱穴は、柱抜取穴があり、焼土の混った黄色の山土が入る特徴がある。西側の建物群の中央には幅約30cmの南北石組溝(溝04)がある。

主要建物規模一覧

単位：m

時期	遺構番号	東西長(柱間)	南北長(柱間)	振れ
A-2	建物01	4.2 (1.4)	18.9 (2.1)	
	建物02	4.8 (1.6)	4.5 (1.5)	
	建物03	5.4 (1.8)	4.2 (1.4)	
	建物04	—	10.5(5間分)(2.1)	
A-3	建物05	7.8(3間分)(2.6)	15.6(6間分)(2.6)	北で東
	建物06	4.5 (1.5)	6.3 (2.1)	
	建物07	4.2 (2.1)	1.8(1間分)(1.8)	
	建物08	— (1.8)	6.6 (2.2)	
	建物09	4.8 (1.6)	4.2(2間分)(2.1)	
B	建物10	6.3 (2.1)	24.0(10間分)(2.4)	北で西
	建物11	布掘建物 —	7.6 (1.9)	
C-2	建物12	4.2 (2.1)	7.2 (1.8)	北で西
	建物13	5.4 (1.8)	—	

〈B期〉A期の建物・溝をすべてとりこわす。A期の溝03の東側の位置に南北塀(塀04)がつくられる。この塀の西側には、長大な南北棟建物(建物10)と、布掘地業をもつ総柱建物(建物11)がたつ。建物10は桁行12間以上×梁行3間で、さらに調査区北側にのびる。建物11は東西方向に幅約1m、長さ約5.5mの溝を5条掘って、そこへ柱を建てたもので、梁行は3間と推定される。塀04の東側はこの時期の建物はなく、調査区東端に南北塀03がある。この時期の遺構は造営方位が北で西に振れる傾向がある。

〈C期〉遺構の重複から2つの小期がある。

C-1期；A期の溝03の東側の位置に南北溝(溝06-A)がある。幅約3mの素掘りで、C-2期には西側へ雑な石積みで護岸している(溝06-B)。この溝は第7次調査まで、南北道路の西側溝としていたものが、前回調査区で西へ折れ、さらに北へ折れてのびているものである。調査区東側にも南北素掘り溝(溝05)がある。

C-2期；建物12・13、建物12のすぐ北に井戸01、南北溝(溝06-B)がある。井戸01は円形掘形の中に、内法約80cmの方形石組をもつ。

## 遺物

出土遺物には、土器類・瓦類・金属製品・石製品などがある。土器類では7世紀中頃から8世紀初頭にかけての土師器・須恵器が最も多く、他に弥生土器・縄文土器が少量ある。この他、土馬・陶硯・墨書土器などがある。瓦類はごく少量である。金属製品には、釘・鍬・斧・刀子・紡錘車・鎌・カスガイなどの鉄製品がある。石製品には、砥石の他、管玉・勾玉・鍬・石刀・石包丁などがあり、縄文時代から古墳時代のものが多い。

## おわりに

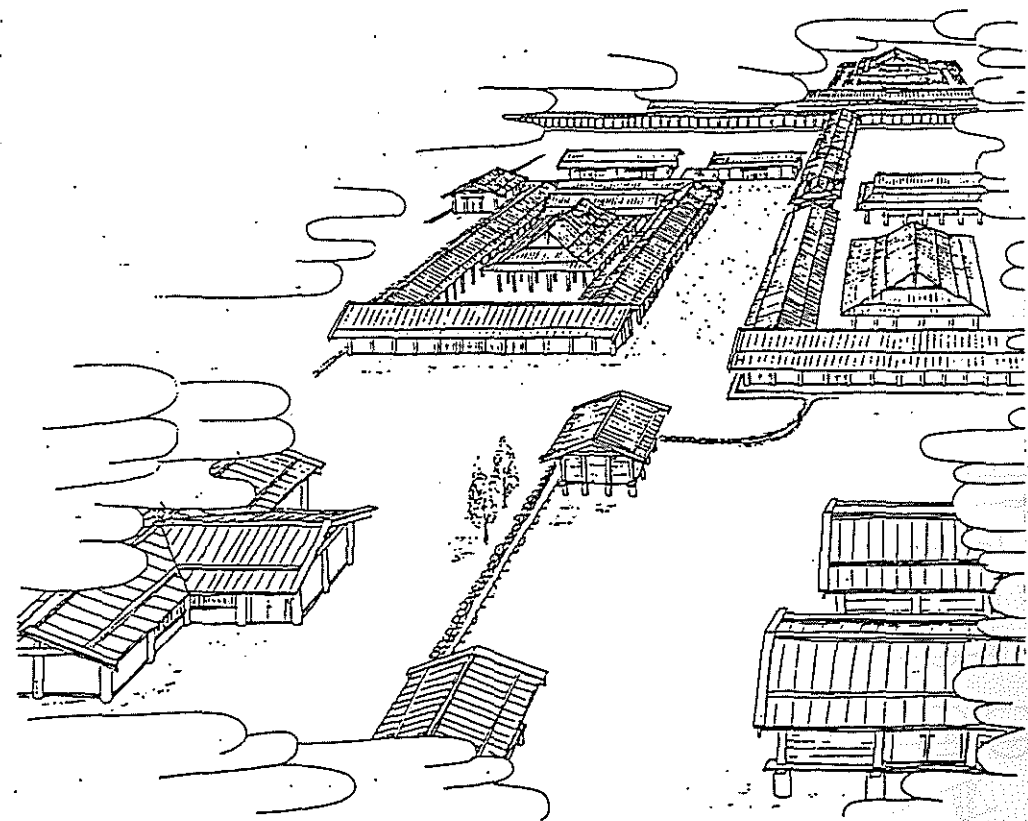
前回の調査で、各時期とも主要な遺構のまとまりが一応の区切りを見せたことから、今回の遺構のあり方が注目された。その結果、各時期ともに遺構がさらに北に続くことが明らかとなった。

これまでの調査結果と今回の成果を総合すると、A期ではA-2期のまとまった建物群を検出し、第8次調査と合わせ、南方の井戸周辺の建物群と約50mの空間をもって一つの建物群が存在することがわかった。大規模な東西棟建物と南北棟建物とが並び、その西方には倉庫群がある。A-3期は南北石組

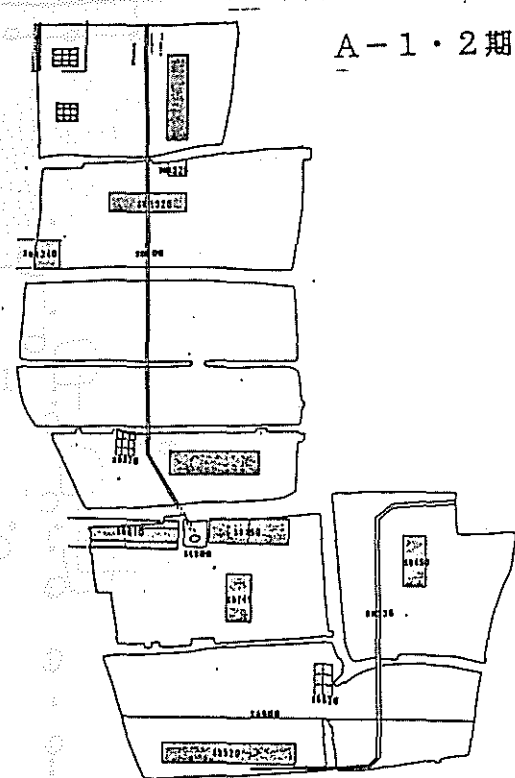
溝を境として東西2区画が長大な建物で構成されるが、今回の調査で東の区画には新たに特異な形状の建物が検出され、東区画の性格を考える上で新たな資料となった。西の区画にはA-2期から連続して倉庫群が存在することになり、斉明朝の饗宴施設に関連する倉庫群がこの一帯にあることがわかった。

B期はA期とは全く異なった遺構配置をとることがこれまでの調査で明らかになっている。今回は桁行が12間以上という長大な南北棟建物を検出し、南北塀によって区画された中に南北棟建物が建つという状況がさらに北へ続いていることとなった。C期の遺構は前回調査区から稀薄となっているが、今回は東側で井戸と建物を検出した。特に井戸はめずらしい方形の石組をもつ。

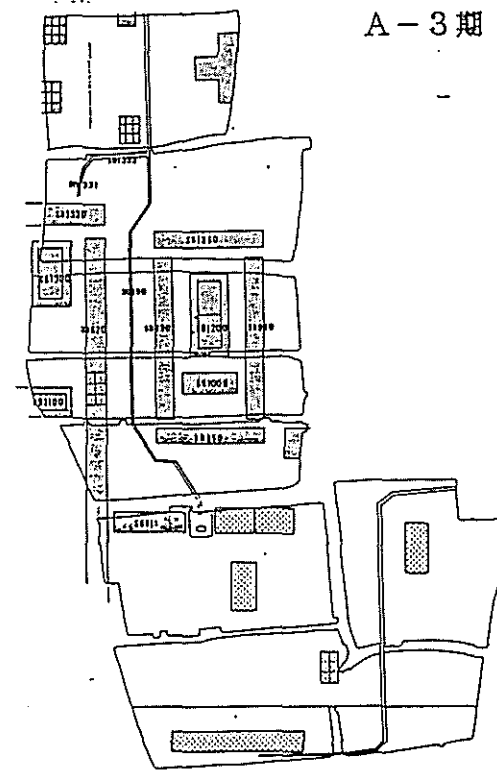
以上、各時期にわたって新しい知見を得られ、石神遺跡がさらに北へのびることから、今後の調査の進展が期待される。



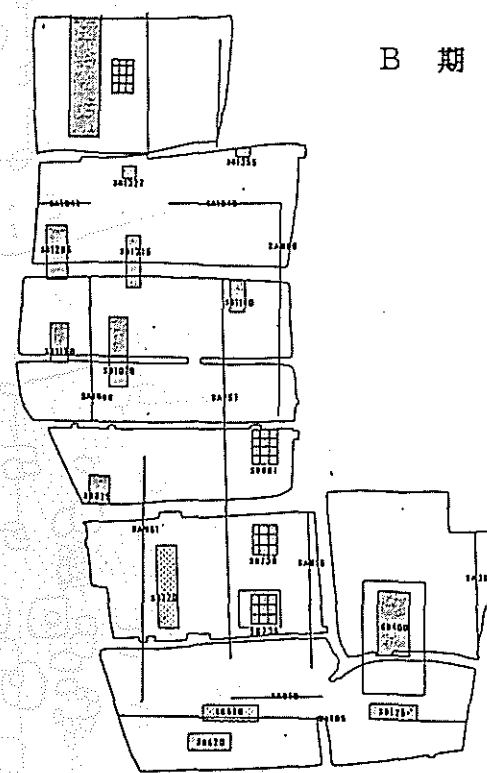
石神遺跡復原図 (A-3期)



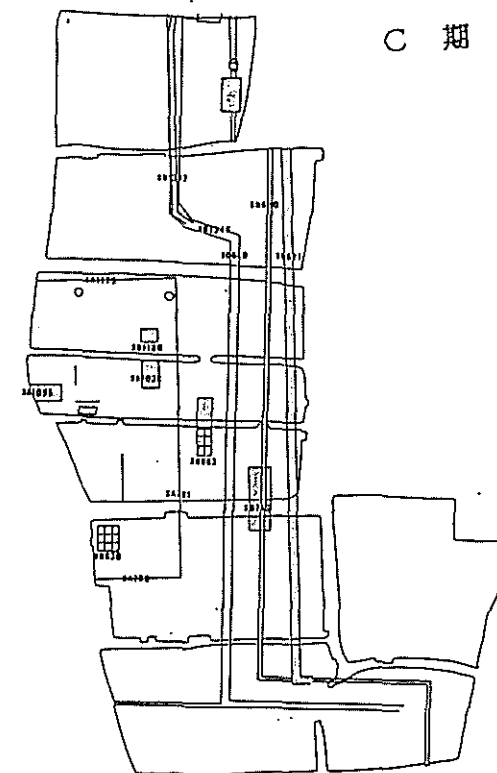
A-1・2期



A-3期



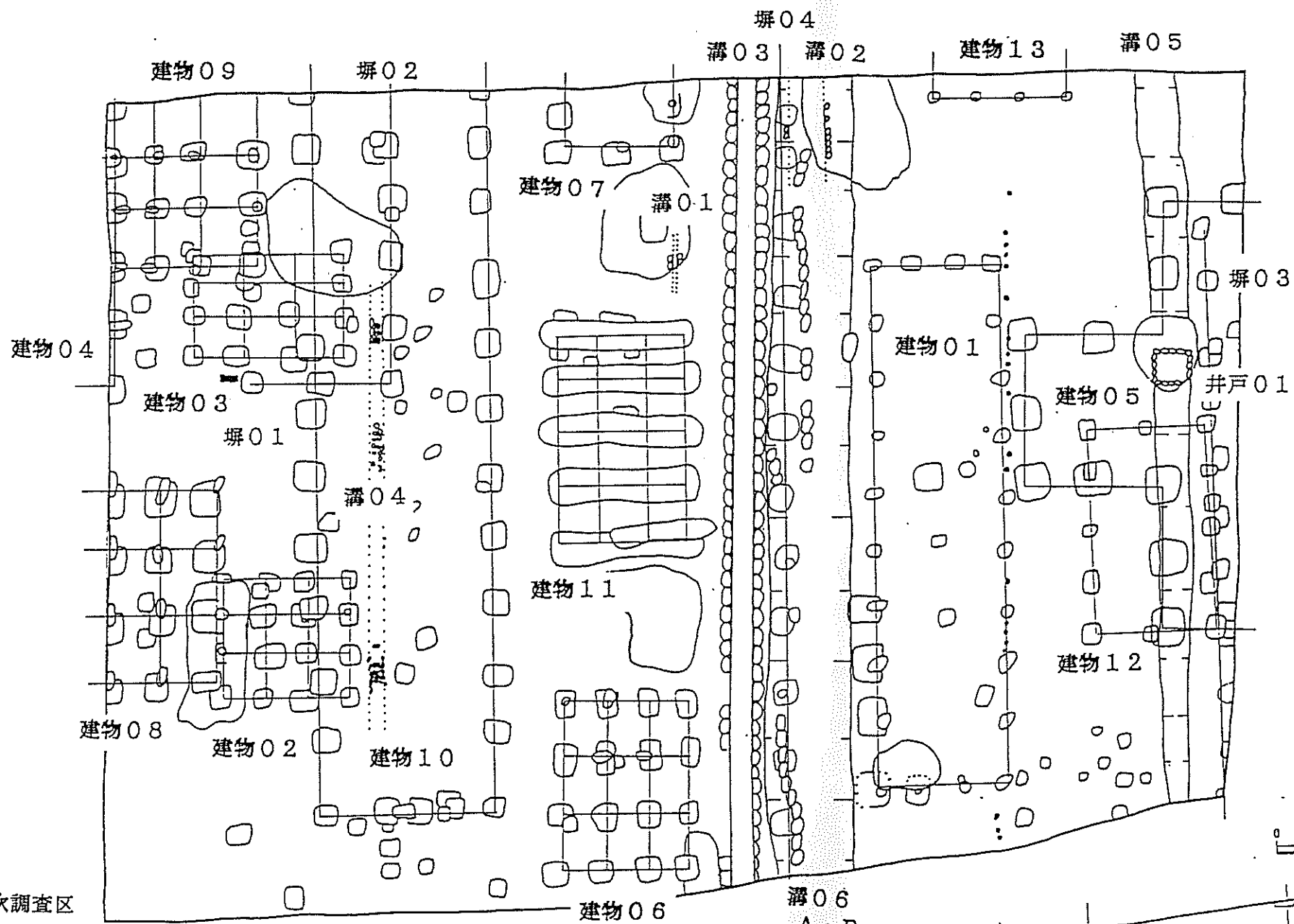
B期



C期

遺構変遷図

A期-7世紀中頃・斉明朝、B期-7世紀後半・天武朝、  
C期-7世紀末~8世紀初頭・藤原宮期



第9次調査区

第8次調査区

